

Title	『ジョナサン・ワイルド』の周辺
Author(s)	飯沼, 馨
Citation	英文学評論 (1961), 9: 1-13
Issue Date	1961-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/RevEL_9_1">https://doi.org/10.14989/RevEL_9_1</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 『ジョナサン・ワイルド』の周辺 (1)

飯 沼 馨

ヘンリ・フィールディング (Henry Fielding, 1707-54) の諷刺小説『ジョナサン・ワイルド』は、いまもなお、生きている。書かれてから二百年あまりたった今日でも、まだ、いきいきとした生命を持ちつづけている。この、すぐれた作品について、私はしばらく考えてみたいと思うのだが、その前に、私としては、この小説に関係のある、いくつかの事柄を、すこし、しらべておきたく思った。その一つは、たとえば、この小説が、いつ書かれたかという問題である。

『ジョウゼフ・アンドルーズ』(Joseph Andrews)のあとに出た『ジョナサン・ワイルド』が、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の出版以前に書かれたか、あるいは、それ以後に書かれたか、ということとは、それ自体としては、さほど重要ではない。しかし、この問題の解明が、それらの小説の内容や手法などとかかわりあいを持ってくるとき、それは、ちょっとおもしろい、一考に価する問題となる。

フィールディングは、一七四二年の二月二十二日に『ジョウゼフ・アンドルーズ』(Joseph Andrews)を出しそれから一年あまりたって、一七四三年の四月十二日に、三巻からなる『雑録集』(Miscellanies)を公にした。そして、この『雑録集』の第三巻目が『ジョナサン・ワイルド』(The Life of Mr. Jonathan Wild the Great)であった。『雑録集』は「予約」の形で出版されたが、四一年から四三年という時代は、彼自身の痛風が悪化し

妻が病氣にかかり、六つになる娘が病死し、そのうえ経済的困窮が深まるといふ、フィールディングにとって、まことに不運つづきの時代であつて、この『雑録集』が金銭的目的のために出版されたことは疑いが無い。フィールディングは手持ちの古い書きものに手を加え、これに、いくつか新しいものを加えて、『雑録集』を予約出版する計画を『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以前から持っていたらしいが、その出版は、自分や家族の病氣などの事情によつて、のびのびとなつていたらしい。しかし、四二年の六月に、彼が、それを印刷する計画を公にしたときには、その年のクリスマスまでには出版できるだろうという見通しを持っていた。しかしそれが、妻の病氣のぶり返しなどによつて再び延引され、やつと、さきに記したように、四三年四月に出版されるに至つた。現在、一般に読まれ、また、われわれが普通口にする『ジョナサン・ワイルド』は、フィールディングが一七五四年に改訂した新版<sup>①</sup>（その時、題名は *The Life of Mr. Jonathan Wild the Great* から *The History of the Life of the late Mr. Jonathan Wild the Great* とあらためられた）なのであるが、それにしても、この『雑録集』の第三巻を占めていた諷刺小説は、いつ頃執筆されたのだろうか。

オースティン・ドブソン (Austin Dobson) は、その著『フィールディング』(Fielding, "English Men of Letters")の第四章で、彼の推測を、いささか漠然と述べている。ドブソンは、フィールディングが三九年十一月から四一年六月まで編集していた「チャムピオン」紙 (*The Champion*) の四〇年三月四日号<sup>②</sup>で、彼が有名な盗賊ジョナサン・ワイルドを引合いに出して、名声は必ずしも美德と関係があるわけではない旨を述べているのに注目する。そして、この小説が実際にいつ書かれたかは疑問だが、これの最初の萌芽がかかる発言と関係があるとすれば、この小説の執筆は、四〇年三月以後におかれねばならない、と述べる。だが、一方、『ジョナサン・ワイルド』の「第二巻」に、『ジョウゼフ・アンドルーズ』中の人物ピーター・パウンス (Peter Pounce) へ

の言及があるところから見て、これは、四二年二月に出版された『ジョウゼフ・アンドルーズ』のあとで書かれたとも考えられうるし、また、「第一巻」の「第十四章」に、バース (Bath) に関する直喩が記されているから、この小説のある部分は、フィールディングが四二年夏に滞在していたこの温泉地で書かれたかもしれないのである。しかし、これがいつ完成されたにせよ、この小説が計画され、書き始められたのは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以前だと考えたい、とドブスは主張する。というのは、つねに一般大衆の好みを注意深く見守っているフィールディングが、『ジョウゼフ・アンドルーズ』を書いたあとで、『ジョンナサン・ワイルド』のような、まったく異った、新しい系統の物語を書くとは思われないからである。

ここで、ドブスは、『ジョンナサン・ワイルド』が完成されたのは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』以後であったにしても、また、ある部分が四二年以後に書かれたにしても、この作品を『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以前の作と見ているようである。

この見解はひきつづき議論のままととなる。クロス教授は、『ヘンリ・フィールディング伝』(W. L. Cross, *The History of Henry Fielding*) の「第一巻」の「第十四章」で、このような考え方に反対する。教授は、たいいていの批評家が、『ジョンナサン・ワイルド』の書かれた時期を、あとからつけ加えられた部分とは別として、早くに置き、ある場合には、一七三七年頃、おそくとも、フィールディングが「チャムピオン」紙の主筆をしていた頃と推定し、フィールディングが『ジョウゼフ・アンドルーズ』を書いたあとで、他のタイプの小説を試みるはずがない、と主張しているのに異議をとなえる。また教授は、「チャムピオン」紙のいくつかの政治的論文と『ジョンナサン・ワイルド』との、ある類似に目をむけて、この小説の執筆時期を早くに置こうとする傾向にも反対して、両者のあいだに、ある類似があるにしても、かかる思想やスタイルの類似は、他の考察の裏打ちがないかぎ

り、『ジョナサン・ワイルド』の書かれた時期を定めるには役立たぬ、とする。そしてクロス教授は、「フィールディングが、『この世からあの世への旅』(“A Journey from this World to the Next”)に興味を失って、ウォルポール (Walpole) が敗北を喫した直後、一七四二年の春に、『ジョナサン・ワイルド』に着手したことはありそうなことだ」と主張する。クロス教授によれば、この頃、すべての人がワイルドとウォルポールの類似を心に持ち、新聞もそれを詳述していた。『雑録集』の予約者から先払いを受けていたフィールディングは、その「第三巻」をみたす仕事を目の前に控えていた。それだから、これは彼にとって最良の、しかも、最も容易な主題だった、と教授は推測する。そして、この時代に書かれた証査として、作中に、ピーター・パウンスやバーニスについての言及があること、『ジョウゼフ・アンドルーズ』のなかの、信心深いトルコ人についてのアダムズ (Adams) とバーナバス (Barnabas) との会話を思い起させる個所があること、フィールディングが作中で、奇怪な現象についての超然自的説明を挿入しているのは、一七四二年二月二十日に現われて三月中消えなかつた彗星について述べたものであること、いくつかの政治的あてつけのうち、一七四三年版の「第二巻・第十四章」にでていた ‘Proverb’—“Debauching a Member of the House of Commons from his principles, and creating him a peer, is not much better than making a woman a whore, and afterwards marrying her”—は、*William Putney* とウォルポールとその情婦を諷したもので、このあてこすりには、あきらかに、一七四二年の夏か秋に属するものであること、などを教授は指摘して、これらに注目すれば、フィールディングがいつ『ジョナサン・ワイルド』を書いたかは明白だとしている。このようにクロス教授はこの小説が書かれた時期をはっきりと、『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以後と推定しているわけである。

ドブソンの『フィールディング伝』は一八八三年に、クロス教授のは、一九一八年に出、それから四十年あま

り経て、ダドソン教授の『ヘンリー・フィールドディング』(F. Homes Dudden: *Henry Fielding. His Life, works and Times, 1982*) が出版されたわけであるが、ほぼ七〇年間にこの問題についての見解がどのように押しすめられたかを、ダドソン教授の書物は如実に示しており、その主張は、ドブスンやクロス教授の説よりもさらに深い分析のうえに立ち、この問題にまつわる種々の疑問を巧妙に解決してくれると云えるだろう。

教授は「第一巻」の『ジョナサン・ワイルド』を論じている個所で、まず、この小説の構造を分析し、これが二つの部分からなっていることに注意する。この二つの部分は、互に融合して、たぐみに一つの全体を構成しているが、教授によれば、それは、(a)「ジョナサン・ワイルドの生涯の諷刺的スケッチ」の部分 (the 'Wild section') と、(b)「ハートフリー許取に関連する一連の事件の説明」の部分 (the 'Wild-Heartfree section') に分たれうる。そしてさらに (b) の部分には、(c)「ハートフリー夫人の冒険物語」 (the narrative of Mrs. Heartfree's adventures) という異質な部分が存在する。さらに教授の説明によると――

右のうち (a) の 'Wild section' は、擬似英雄体 (mock-heroic style) で書かれたワイルドの一代記で、この部分は、はっきりした政治的色彩を有し、ここで最も直接的で激烈な政治的あてつけが行われており、ワイルドがウォルポールに擬されているのも主としてこの部分である。

(b) の 'Wild-Heartfree section' は、ワイルドのハートフリーからの許取と、それに関連する出来事の物語で、「偉大な」ワイルドと、「善良な」ハートフリーの葛藤を通して、「偉大さ」と「善良さ」の衝突が、ドラマティックに示され、フィールドディングの善良な人間に対する心からの共感と、悪党に対する心からの嫌悪が見てとられる。そして、この部分は『ジョウゼフ・アンドルーズ』や『トム・ジョウンス』(Tom Jones) との類似(たとえば、ハートフリーとアダムズとの性格や信念の類似、ハートフリーの家族のものへの愛情とウィルソン (Wilson) のそ

れとの共通性、また、ハートフリーとワイルドの対照は、トムとブライファイル (Bill) の対照を思わせ、両方の作品で、最後には善良さが勝利をしめ、悪徳が罰せられることなどが目立っていて、こういうことから、この小説は『ジョウゼフ・アンドルーズ』と『トム・ジョウズ』の間に書かれたのではないかと推測したくなる部分であり、『Wild section』よりも気軽に、あらたに書かれたように思える部分である。そして、そのことは、一七五四年版で、フィールディングがこの部分により多く手を加えていることから知られる。そして、この部分は、フィールディングによって、異った気分と態度で書かれ、適当な間隔をおいてワイルドの伝記中に巧妙にさし込まれた、一連の出来事の物語である。

ダドン教授に云わせると、この物語が上記のような二つの部分から成り立っていることは、この書物が、いつ頃書かれたかを推定する場合に、心にとめておかねばならぬことなのである。

さらに、ダドン教授は、この 'Wild-Heartree section' のなかに、その他の部分とも、また、'Wild section'、とも類を異にする物語が含まれているとする。教授の云うこの異質的な物語が、ハートフリー夫人がワイルドの魔手から脱れたあととの冒険の物語であることは、『ジョナサン・ワイルド』を一読したものには明白である。というのは、この冒険談は、『ジョウゼフ・アンドルーズ』を書いたあとで、フィールディングがかかる物語を果して書くだろうかと人々に疑いを抱かせる部分であるから。当時、途方もない、奇怪な冒険談や、貞淑な婦人が男たちの誘惑を斥ける誇張されたロマンスが流行していたといわれるが、たしかに、この物語は、フィールディング自身が「序文」のなかでちょっとほめかしているように、かかる物語に對するパロディやバリエスクの意図を含んでいたと考えざるをえないだろう——尤も、一七五四年版では、この冒険談の部分は、巨大な怪物などの見聞記とも云うべき一章が省略されて、四つの章に縮少され、以前よりは 'probability' の線に沿

うようにされはしたが、いずれにしてもこの部分は、教授の云うように、他とは全く異った種類の物語となっているのは事実である。

この部分の特徴を、ダドン教授はいくつかあげている。まず、この部分では新しい場面と人物が導入され、単純素朴で家庭的な女性として描かれてきたハートフリー夫人が、急に賢明で機略縦横な婦人として現われる。かかる喰い違いと共に、この部分は、この書物の均衡を破り、その均斉をそこねる。この部分は、ハートフリー夫人が、夫の財産を復活させる手段となる宝石類をたずさえて、ニューゲイト監獄に突然姿をあらわしたことを説明するのに必要だが、フィールディングほどの作家なら、もっと簡単に短い説明を工夫できたはずである。しかも、この部分が挿入された個所は、物語がクライマックスに達せんとし、読者が結末をききたくてもうずうずしているときで、長たらしい脱線が最も不適切な時である。ところが、あまり適切でもなく、面白くもない冗長な冒険談がはさみ込まれる。これ以上時機をえぬ脱線は考えられない。——こうダドン教授は考えて、かかる理由にもとづいて、この物語は後から挿入されたものにちがいないと主張する。つまり、これは、短い別の物語であったものを、フィールディングが、ハートフリー夫人のニューゲイト監獄到着を説明するために、必要な個所に手を加えて主物語にはめ込んだものであろう、と推定する。

私がいままで、この小説の構造についてのダドン教授の分析を、いささか詳細に記してきたのは、それらの考え方が、きわめて明快で充分首肯しうると考えるからであるが、物語の構造についてのかかる分析のあとで、教授は、この小説の書かれた時期に推測を下そうとする。この方法は、今までのように、物語の諸所に記された執筆時期に関係のある事柄だけを拾い集めて推量するのちがって、それが物語の手法についての内面的考察に裏打ちされている点で、推定方法の深まりを示していると同時に、一層興味あるものと云わねばなるまい。



たしかに、ドブスンやクロスやダドン教授がそれぞれあげている証拠や根拠を考えてみると、『ジョナサン・ワイルド』が、一七四二年二月出版の『ジョウゼフ・アンドルーズ』（この執筆時期は、一七四一年秋から冬へかけて、と推定されている）よりも先に書かれたとも、また、その出版以後に書かれたとも思えるふしがある。

『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以前に書かれたのではないか、という根拠としては——この作中でフィードリングがワイルドを扱いながら、たえずウォルポールを横目でにらんでいる、その対比の入念さ、鋭さは、一七三七年にこの宰相が制定した「演劇取締法案」の一撃に、いまだ腹を据えかねているフィードリングが、私怨と公憤から、他の反ウォルポール派の連中と相呼応して、四二年二月はじめまで宰相の地位にあったウォルポールを諷刺したためと考えざるをえないこと、フィードリングが四一年六月まで編集者であった「チャムピオン」紙の政治的論文と、この小説の政治的部分の間に多くの符合点があること、『ジョウゼフ・アンドルーズ』で成功を取めたフィードリングが、異ったタイプの物語を危険をおかして試みるというようなことはありそうにないこと、このようなことが、あげられるだろうかかかる点に重きを置けば、『ジョナサン・ワイルド』は、『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以前に書かれ、これを一七四二—三年に手を加えて、他の初期の書きものと共に、『雑録集』の形で出版したものと考えられる。

しかし一方、『ジョナサン・ワイルド』には、あきらかに、四二年以後にかかれたのだと思われる種々の証拠がある。すなわち、この小説には、ハートフリーに金を融通することを拒否した連中のなかに、ピーター・パウンスの名が記されている（第二巻第七章）こと、一七四二年春に、最後のな形をとったと考えられる『この世からあの世への旅』の「第一巻第六章」を思わせる言及——人間は自然によってある特殊な役を振当てられて、この世に生れてくるというような言及——が、この小説中にも記されている（第二巻第十二章）こと、また、有名

なニューゲイト監獄内での勢力争いの部分（第四卷第三章）で、この場合ロウジャ・ジョンソンはウォールポールであり、ジョンソンにとって代るワイルドは、ウォールポールの失墜後彼にとって代って大蔵大臣となったウィルミントン（Wilmington）であるとすれば、この部分は四二年二月以後に書かれたと考えられねばならぬこと、また、クロス教授の意見の所ですにふれた一七四三年版第二卷第十三章の「最近あらわれた幾多の不思議な現象」とが、四二年二月二十日から三月へかけて現われた彗星のことであれば、これはそれ以後に書かれたものしなければならぬこと、同じく、すでに記した一七四三年版第二卷第十二章の‘Proberv’ XII が、ウォールポールに対する反対派を指導したのち貴族の位をえたウィリアム・パルトニイへの皮肉であれば、これは彼がバース伯爵（Earl of Bath）となった一七四二年七月十三日以後に書かれたにちがいないこと、また、バースへの直喩（第一卷第十四章）の存在は、この部分が、フィールディングが一七四二年夏に滞在していたバースで書かれたと考えること、このようなことを考えてみると、この物語は一七四二年以後、つまり『ジョウゼフ・アンドルーズ』出版以後に書かれたという印象が、たしかに、濃厚となる。

やぎに『ジョナサン・ワイルド』の構造を、ワイルドの伝記的部分（‘Wild section’）と、ワイルドとハートフリーの葛藤を記した部分（‘Wild-Heartfree section’）と、ハートフリー夫人の冒険談の部分（‘Mrs. Heart-free’s travel-narrative’ section）との三つに分けたダドン教授は、この小説が書かれた時期に関する上記のような疑問を前にして、どういう解決を下そうとするのだろうか。

ダドン教授は、この物語の、これら各部分は異った時期に書かれた、とするのである。教授の意見を要約すると、

- (a) ワイルド・セクションは、ウォールポールが内閣を組織していた時、つまり、一七四〇年頃に書かれ、これ

を、ひまなときに手を加えて推敲完成するつもりで、あわてて出版せず、手元に置いておいた。

(b) この仕事は『ジョウゼフ・アンドルーズ』の執筆によって中断された。『ジョウゼフ・アンドルーズ』を終えると、フィールディングは『雑録集』の準備にかかり、その三巻を、手元にある、未出版の原稿で埋めようと決心した。そのなかに、『この世からあの世への旅』の草稿や、上記のワイルド・セクションのスケッチが含まれていた。

(c) このスケッチは、ウォルポールの失墜による政治的情況の変化と、自分の得手が、これとは異ったスタイルの物語にあることを発見したために、フィールディングはこれに満足せず、この草稿に手を加えてその内容を新しい政治情勢に適合させると同時に、つまり、ウォルポールへの攻撃をやわらげたり権力を握ったウィルミントンへの諷刺を加えたりすると同時に、それに全く新しい一連の非政治的エピソード(ワイルド・ハートフリー・セクション)をつけたした。

(d) ワイルド・ハートフリー・セクションは、ハートフリー夫人の冒険旅行談の部分を除いて、このときにはじめて書かれた。これによって、フィールディングは、「偉大さ」の研究を拡大して、「偉大さ」と「善良さ」の劇的衝突の物語を展開させた。フィールディングが、このように、新たに書かれたワイルドとハートフリーにからまる数章を挿入して、ワイルド・セクションの旧稿を拡大し、新旧の材料を巧みに調査して、一つの首尾一貫した全体にまとめあげた時期は、疑いもなく、一七四二年後半と、たぶん一七四三年のはじめの数週間のあいだだった。

(e) ハートフリー夫人の冒険の物語は、たぶん、フィールディングがあらゆる種類の文学様式における実験を試みた「チャムピオン」紙時代に書かれた。つまり、それが最初の形で書かれたのは、一七四〇年頃であろう。

だが、フィールディングは、これを公にせずじまつておいた。そして一七四二年になって、ワイルドについての最初のスケッチに、新しいハートフリーに関する物語を織りませるときに、フィールディングはこれを利用して、目的にかなうように手を加え、物語中に編入した。

右のように、ダドン教授は、ワイルド・セクションの草稿と、ハートフリー夫人の冒険談の部分の草稿は、一七四〇年頃に、ワイルド・ハートフリー・セクションは、一七四二年に書かれ、古い材料の修正と変更、新しい材料の執筆と挿入、全体の最後の仕上げた推敲彫琢は、一七四二年の後半と一七四三年のはじめ数週間に完成されたにちがいない。しかも、その仕事は、全物語が、いつときに書かれたかのような印象を当てるほど全く賞讃のすべき巧妙さをもってなされた、とするのである。

このダドン教授の推理は、きわめて見事だと云わねばならない。教授の意見は「コロンブスの卵」のごとき性質を持っているが、すぐれた緻密な洞察を含み、たしかに理にかなって、すくなくとも私を納得させるにたまり。この考え方によって、ドブスンやクロス教授の意見の不備が埋められるだろう。

ウォルポールに公私の立場から敵対するフィールディングが、一七四〇年頃に、反ウォールポール熱のたかまつた社会的雰囲気の中かで、その文才に物を云わせて、ワイルドに託してウォールポールの諷刺を行ったということは充分にありそうなことであり、さらに『ジョウゼフ・アンドルーズ』の執筆によって、ノヴェルという新しい物語ジャンルの鉱脈を掘りあてたと確信するフィールディングが、あらたにハートフリー一家を登場させることによって、彼の抱く思想を、すでにコッスを会得した小説の形で、より深化拡大させたということもきわめて妥当なことと考えられる。また、ダドン教授のように考えることによって、異質的な、ハートフリー夫人の冒険談の謎も容易に解けるだろう。この部分は、外見上、理屈上は、フィールディングの云う蓋然性をふんまえている

ようには見えるが、リアリズム——そのリアリズムは、現代的リアリズムほど固苦しいものではないが——を追  
 求するフィールディングにしては、それも、『ジョウゼフ・アンドルーズ』で、すでに古い形の架空的な物への  
 蔑視を表明し自己のリアリズムを展開してみせたあのフィールディングならば、およそ書きそうもないエピン  
 ードと云わねばならず、その非現実性は覆うべくもない。それゆえ、リアリストのフィールディングが、一七四  
 ○年頃に、当時の奇怪な冒険物語や、貞淑さを誇張したロマンスのパロディ、パレースクとして書いたものを、  
 『ジョナサン・ワイルド』のなかに、にわかには手を加えて利用したと考えることは、これも当を得ていると云え  
 よう。また、一七四〇年頃にフィールディングが、ワイルドにかこつけたウォルポールへの諷刺や、ハートフリ  
 ー夫人の冒険談のごときものを書いたであろうことは、彼が、「チャムピオン」紙時代に色々の物語ジャンルに  
 手を染めていることから充分に想像しうる。たしかに「チャムピオン」紙時代は、彼の劇作と小説をつなぐ環  
 をなしており、劇作家であったフィールディングが、やがて小説家として世に出るための修業時代、徒弟時代と  
 も云える時期であつて、フィールディングはこの時代に、それを意識するしないにかかわらず、散文技術をみが  
 き、種々の物語ジャンルへの模索を行った。たとえば、「チャムピオン」紙には、エッセイ類は別として、キャ  
 ラクター・スケッチや、「ケアロンの舟」(Charon's boat, 24 May 1740)、「詩神の岡」(The Hill of the Muses,  
 13 Dec. 1739)、「富の宮殿」(the Palace of Wealth, 27 and 29 Dec. 1739) などとして知られた幻想物語や寓話  
 がのせられたし、また同紙の番号にわたって「ジョブ・ヴィネガ氏の船旅」(Voyages of Mr. Job Vinegar) の  
 ようなスウィフト流の架空的航海記が掲載された。また、一七四一年三月二十一日から四二年六月二十六日まで  
 の間には、『雑録集』の第二巻目の大部分をしめる幻想的な寓話『この世からあの世への旅』の草稿が書かれた  
 と推測されている。さらに彼は、四一年十二月に、『反対派』(The Opposition: a vision) なる諷刺的な幻想

物語を出版した。このような事実を見れば、この時代に彼が、ワイルドの形象を用いたウォルポールへの諷刺や、冒険物語などのパロディを書いたと考えることは、確たる証拠がなくても充分想像しうることであろう。

いずれにせよ、ダドソン教授の、『ジョナサン・ワイルド』が書かれた時期に関する考察は、この問題について鮮やかな光をなげたと云えるものであり、また、それが、この小説の構造についての興味深い分析と洞察をふんまえて主張されている点で、きわめて示唆深いと云わねばならない。(未完)

私は、このあと、フィールディングとウォルポールとの関係、彼の「偉大さ」と「善良さ」についての考え方などをさぐって見たのであるが、原稿の整備が締切日までに間にあわなかったために、これらは次号にゆずって頂くことにした。この不手際について御諒承をえたい。

註① “The Worlds’ Classics”, No. 382 *Jonathan Wild* は、一七四三年版を翻刻したもので、“Appendix”は、四三年版と五四年版の相違が対比をなしている。

② Leslie Stephen (ed.): *The Works of Henry Fielding*, vol. V に再録。

③ 一七五四年版では第二巻第十二章。クロス教授やダドソン教授によれば、四三年版で *lately appeared* となっていたのが、五四年版では *formerly appeared* と訂正されたところ。(“The Worlds’ Classics” の *Jonathan Wild* (一九五一年版) は、*formerly appeared* となっている)

④ これらも上記 Leslie Stephen (ed.): *The Works of H. Fielding*, vol. V に再録されている。